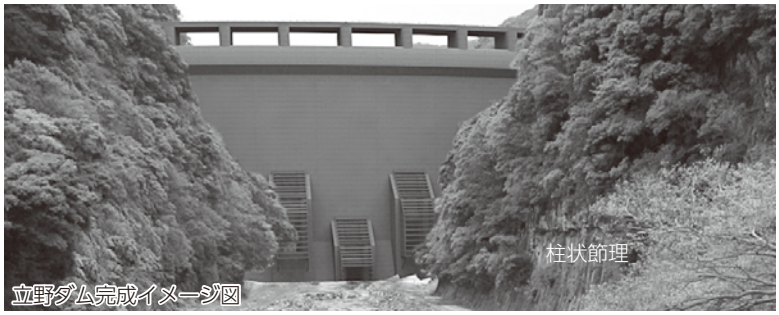
連載

立野ダム 第1回 概要とこれまでの動き



立野ダム完成イメージ図

立野ダムの概要
【位置】白川と黒川の合流点から約1㎞下流
〈右岸〉南阿蘇村立野
〈左岸〉大津町外牧
【目的】洪水調節専用ダム（流水型ダム）
【高さ】約90m　【幅】約200m
【総貯水容量】約1,010万㎥
【完成予定】平成34年度

現在整備が進められている立野ダム。構造物としての規模だけでなく、担う役割もまた大きなものです。

広報では、8月号（今号）から10月号にかけての3カ月連載で、立野ダムについてお伝えしていきます。

これまでの動き

村を東から西へと横断して有明海まで注ぐ白川。流れ込む湧水群が名水百選に選定された一級河川ですが、時に大雨による氾濫でその流域に大きな被害をもたらしてきた歴史があります。

白川に流れる水の量を調節し、洪水災害の発生を防止するため、河川改修と同時に立野ダムの建設が検討されました。これまで長い時間をかけて、調査や説明会、用地交渉などが行われ、ダムの計画整備は進められてきました。

○どうしてダムが必要なのか

白川は近年でも、おおむね過去20～30年に1回発生する確率規模の洪水が、3回発生しています。平成24年7月の九州北部豪雨では、※家屋の全半壊約1，450戸、一部損壊・浸水戸数約1，400戸の被害が生じました。これらの被害は、河川改修、黒川遊水地群の整備、そして立野ダムの建設によって大幅に解消されるものであり、立野ダムは白川の治水上、必要不可欠なものです。

国土交通省九州地方整備局 立野ダム工事事務所の鵜木和博所長からお話をお聞きしました。

※平成24年7月の九州北部豪雨での流域内市町村の全体の被害戸数（河川以外も含む）

○ダムはどのような役割を果たすのか

立野ダムは、昭和28年6月（150年に1回発生する確率規模の洪水）と同程度の洪水に対して、基準地点である代継橋地点において洪水を防ぐための基準となる河川の流水量3，400㎥／sのうち、立野ダムで400㎥／sを調節して河川に流れる水の量を減らし、洪水被害の防止または軽減を図ります。ダムの効果はダムのすぐ下流から発揮されるため、立野ダムの場合は、大津町、菊陽町および熊本市において水位を低下させる効果があります。

立野ダムは、白川下流域に住む人々の大切な人命と財産を守るために整備が進められています。

次回、連載の第2回（広報9月号）では、立野ダムとはどのようなダムなのか、構造や工事計画などについてお伝えする予定です。

立野ダムに関するこれまでの動き

昭和28年6月26日	大水害の発生により熊本市、阿蘇郡内で甚大な被害が発生
31年4月	建設省（現在は国土交通省に再編）が直轄による白川の河川改修に着手
44年4月	立野ダム建設予備調査に着手
47年5月	立野ダム予備調査の申し入れが村（旧長陽村）に提出され、村は議会への申し入れに同意
54年4月	立野ダム建設実施計画の調査開始
55年8月	台風による大規模な洪水が発生
57年5月	白川下流域の熊本市、大津町、菊陽町、飽田町（現在は熊本市に合併）による立野ダム建設促進期成会が発足
58年4月	立野ダム建設事業着手
59年4月	旧長陽村役場に立野ダム対策室設置
59年9月	宅地・建物の損失補償基準を妥結
平成元年5月	農地・山林の損失補償基準を妥結
2年7月	阿蘇地方集中豪雨による洪水の発生
5年1月	村（当時長陽村）地域整備計画の協定書調印
5年3月	白川水源地域対策基金設立
9年3月	ダム工事のために建設された長陽大橋が開通
14年7月	白川水系河川整備基本計画の策定
24年7月	九州北部豪雨の発生
24年12月	ダム検証で「事業継続」の方針決定
26年4月	仮排水トンネルの着工
28年4月	熊本地震の発生
28年8月	技術委員会で「建設に支障となる技術的課題はない」との結論
30年8月5日	立野ダム本体工事の起工式